

小学校の音楽デジタル教科書における日本の民謡の基礎調査

－ 《こきりこ》を事例として－

鈴木慎一郎*

A Pilot Survey of Japanese Folk Song in Digital Textbooks for Elementary
School Music Education:
A Case Study on “Kokiriko”

SUZUKI Shinichiro

キーワード : 小学校の音楽デジタル教科書, 日本の民謡, 《こきりこ》, DVD, 学習プラン

Key Words : Digital Textbooks for Elementary School Music Education, Japanese Folk Song, “Kokiriko”,
DVD, Teaching Plan

はじめに

本稿の目的は、小学校の音楽デジタル教科書を取り上げ、日本の民謡に着目して分析を行い、音楽デジタル教科書を活用した指導法開発を行う際に必要とされる基礎資料を得ることである。

教育における情報化が進化する中で、児童生徒の学びを質・量側面から向上させるため、学びの手段や学習環境としての ICT の将来性・可能性を見据えて、教科書への ICT の活用の在り方について検討が求められている¹。

「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議²によると、「デジタル教科書が、児童生徒の学びの充実に資するものとして、我が国の教育現場に円滑に根付いていくためには、(中略)関係者間で密接な連携を図るとともに、様々な機会を通じて、デジタル教科書の導入に向けた考え方や具体的な活用方法等について、広く情報提供や普及・啓発を行う等により理解促進を図ることが必要」とされる(図1)²。さらに以下のように言及する³。

授業の質は、ICT 活用指導力等の教員の指導力によって大きく左右される可能性がある。デジタル教科書の導入によって、個々の教員の指導力に大きな差が生じることのないよう、大学の教員養成課程や、独立行政法人教員研修センター、各教育委員会等における研修等を通じて、ICT 活用指導力を含めた教員の指導力向上のための取組の充実が必要である。

音楽デジタル教科書に関する先行研究としては、坂本暁美が挙げられる。「音楽科デジタル教科書の内容に関する一考察」⁴「音楽を教えることに不安を感じる教師にとってのデジタル教科書の可能性」⁵「小学校音楽科デジタル教科書活用の実証研究」⁶等がある。これらの研究により、音声情報

* 鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

が視覚情報として提示できる点が、音楽科デジタル教科書の授業支援ツールとしての顕著な特徴とし、授業運営と演奏技能補助の面で効果があることを指摘する⁷⁾。

音楽デジタル教科書を取り上げた先進校としては、富山県永見市宮田小学校が挙げられる。公益財団法人パナソニック教育財団の実践研究助成（2015年度）を受け、タブレット PC や音楽デジタル教科書等を活用した授業実践を行い、その成果を「実践事例集」としてまとめている。音楽デジタル教科書に関しては、「演奏」「拡大」「動画」の機能が多く使用され、「教師の説明や指示が分かりやすくなる」「子どもたちが集中し、意欲的に取り組む」等の教育効果を指摘する⁸⁾。

ところで現行の学習指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽の指導」の充実が謳われ、教科書においても日本の代表的な民謡が掲載され、教材として位置付けられている。また、佐川馨⁹⁾や志民一成¹⁰⁾等研究者による実践研究も展開されつつある。とはいえ、現状を見ると、一部の関心の高い教員によって実践が展開されるに留まり、定着しているとは言えない。仮に実践されたとしても、鑑賞に留まっている授業が多い。筆者が鳥取県の代表的な民謡である《貝殻節》の実践率について鳥取市内を対象に調査したところ、小学校は59%、中学校は23%であった¹¹⁾。その要因の一つとして「指導法が分からない」という回答が挙げられた。次期の学習指導要領においても「我が国や郷土の音楽の指導」の一層の充実が求められており、指導法開発は喫緊な課題である。

定着を図るためには、日本の民謡に対する造詣が浅い教員にとっても、実践可能な無理のない指導法を開発し、浸透させることが決め手となる。そのために最も身近な存在である教科書に着目する。近年、発行された音楽デジタル教科書には、音声や動画が収録されており、音楽表現と合わせた日本の民謡の実践の展開も期待できる。日本の民謡を歌い慣れない教員であっても、音楽デジタル教科書を活用することで、表現活動を取り入れた授業実践が可能となると考える。

研究方法としては、第一に音楽デジタル教科書について概観する。第二に音楽デジタル教科書の分析を行い、日本の民謡の掲載方法について明らかにする。第三に音楽デジタル教科書とDVDを活用した日本の民謡の学習プランを構想する。

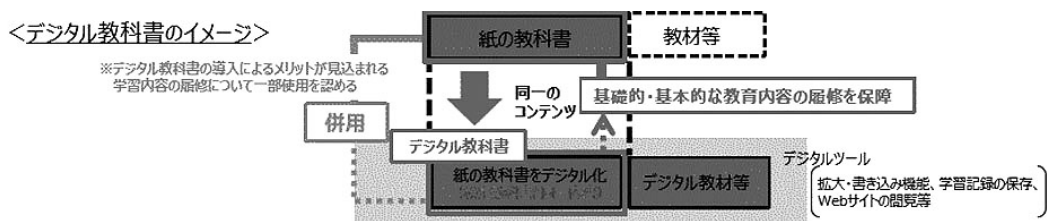


図1 デジタル教科書のイメージ

出典 「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議『「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議 最終まとめ』2016年12月

1. 音楽デジタル教科書

現在、小学校、中学校の音楽の教科書は、教育芸術社と教育出版の2社から発行されている。音楽デジタル教科書についても同様である。

デジタル教科書は、2011（平成23）年度用小学校教科書から、各社が発行を始めた。2014（平成26）年には、90点も発行された¹²⁾。音楽は発行が遅れ、2012（平成24）年に教育芸術社から中学校音楽デジタル教科書が発行されたのが最初である¹³⁾。2015（平成27）年には、教育芸術社と教育出

版の全社から小学校音楽デジタル教科書が発行された(図2)。教科書が改訂された2016(平成28)年には、教育出版からも中学校音楽デジタル教科書が発行され、教育芸術社の中学校音楽デジタル教科書も改訂された。このように、現在は、小中学校で使用されるすべての音楽教科書のデジタル版がなされている。なお、音楽に関しては、現在のところ高等学校のデジタル教科書は発行されていない。

価格については、小学校音楽デジタル教科書に関して教育芸術社が4年間ライセンスで各学年40,000円+消費税、1年間ライセンスで各学年20,000円+消費税¹⁴、教育出版が各学年60,000円¹⁵、中学校音楽デジタル教科書については教育芸術社が1年間ライセンスで各学年20,000円+消費税、無期限で各学年60,000円+消費税¹⁶、教育出版が各学年76,000円である¹⁷。「校内フリーライセンス」のため、同一の学校内ならば、複数のコンピュータにインストールすることが可能である。



図2 小学校音楽デジタル教科書

2. 音楽デジタル教科書における日本の民謡

日本の民謡に関しては、教育芸術社が第4学年の「日本の音楽に親しもう」、教育出版が第4学年の「日本のリズム・世界のリズム」と第5学年の「日本の音楽・世界の音楽」という題材の中で掲載されている。教育芸術社では、《ソーラン節》と《南部牛追い歌》の比較鑑賞を行った後、《こきりこ》の表現活動へと展開する¹⁸。巻末には、「郷土の民謡」として全国の民謡が紹介される。一方、教育出版では、第4学年では「おはやしのリズムやせんりつで遊ぼう」の活動の後、《ソーランぶし》の表現活動へと続く¹⁹。第5学年では共通教材の《子もり歌》の歌唱で始まり、《会津磐梯山》と《音戸の舟歌》の比較鑑賞を行った後、全国の民謡が紹介され、《こきりこ節》と《谷茶前》の表現活動へと展開される²⁰。共通点としては、第一に日本の民謡の特徴である、「八木節様式」と「追分様式」の特徴が鑑賞によって学習されていること、第二に全国の主要な民謡が紹介されていること、第三に曲名の表記は若干異なるものの、《こきりこ》《こきりこ節》が表現活動として実践されていることが挙げられる。

では、音楽デジタル教科書ではどのようなになっているのだろうか。

(1) 教育芸術社

まずは教育芸術社からみていきたい。図3には、曲名の上に「WEB ジャンプ」というデジタルコンテンツがクリックできるようになっており、教育芸術社のWEBサイトにリンクしている。教育芸術社のWEBサイトでは、文章により民謡の解説がされているものの、音声や動画は掲載されていない。

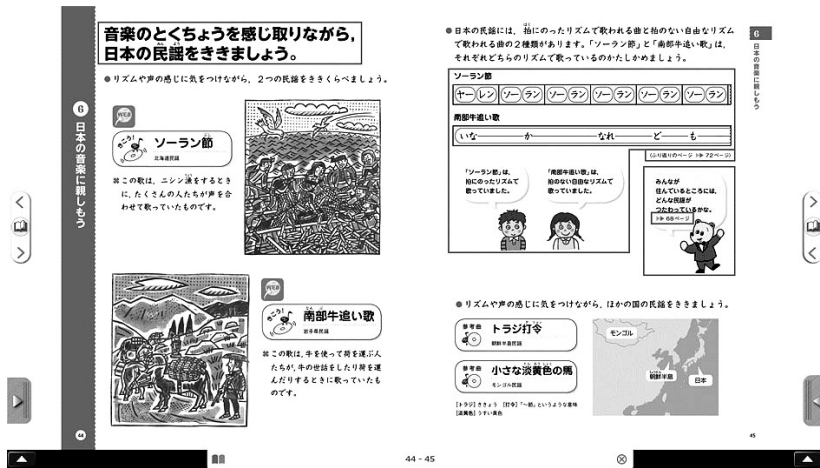


図3 教育芸術社 音楽デジタル教科書

図4は《こきりこ》の部分である。ここでは「WEB ジャンプ」の他、「楽譜」をクリックすると、「音声」へリンク、「歌詞」をクリックすると、縦書きの歌詞へとリンクする。その他、「和だいこの打ち方」については、「動画」で説明される。



図4 教育芸術社 音楽デジタル教科書

歌詞については、図5のように示される。「意味」をクリックすると、左側に難解な語句の補足説明が明示される。また、歌詞の朗読も「音声」で聞くことができる。

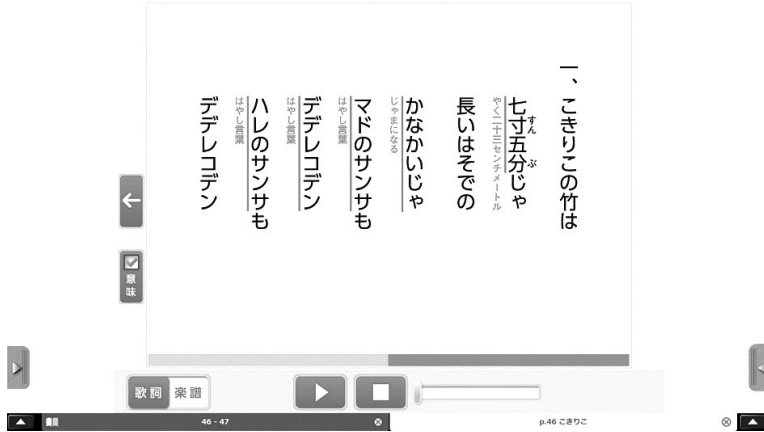


図5 教育芸術社 音楽デジタル教科書

「音声」について図6のように示され、範唱が収録されている。ただし、残念なのは、西洋化された音楽表現であるということである。教科書においても、代替楽器として、ソプラノリコーダーやウッドブロック、鈴等が挙げられている。実際にこの音源においてもピアノにこれらの代替楽器が加わった伴奏で、頭声的発声で歌われた子どもたちの歌声が収録されている。《こきりこ》には、「こきりこ」や「びんざさら」といった伝統的な楽器が用いられている特徴がある。また、発声も頭声的発声ではない。《こきりこ》の伝統が伝わる表現が収録されることが望まれる。



図6 教育芸術社 音楽デジタル教科書

巻末には図7に示したように「郷土の民謡」が紹介される。ここでは「WEB ジャンプ」のみで、音声や動画は掲載されていない。



図7 教育芸術社 音楽デジタル教科書

(2) 教育出版

教育出版については、第4学年の《ソーランぶし》では、「音声」が収録されている。4小節のソプラノリコーダーの前奏に続き、範唱ではなく、ピアノによって旋律が弾かれるのみとなっており、日本の伝統楽器は用いられていない。

図8、9の通り、第5学年では、《こきりこ節》《谷茶前》の「音声」が収録されている。これらも範唱ではなく、ピアノによって旋律が弾かれるのみとなっており、残念である。動画は掲載されていない。

図8 教育出版 音楽デジタル教科書

図9 教育出版 音楽デジタル教科書

3. 音楽デジタル教科書とDVDを活用した日本の民謡の授業プラン

前述の通り、教育芸術社、教育出版ともに富山県民謡の《こきりこ》《こきりこ節》が鑑賞だけではなく、表現教材として掲載されている。ここでは日本最古の民謡とされる《こきりこ》に焦点を当て検討したい²¹。

『歌い継がれる名曲案内 音楽教科書掲載作品 10000』によると、《こきりこ》が教科書に掲載されたのが、小学校に関しては1977（昭和52）年の東京書籍、中学校に関しては1962（昭和37）年の音楽教育図書となる²²。今日使用されている発行者に着目すると、教育芸術社は小学校が1980（昭和55）年、中学校が1966（昭和41）年、教育出版は小学校が1996（平成8）年、中学校が1966（昭和41）年とされる²³。中学校第1学年の歌唱共通教材として指定されたのが、1969（昭和44）年であるため²⁴、指定される以前から教科書に掲載されていたことが分かる（小学校では共通教材として指定されていない）。ただしこの文献は、表現活動として扱われた作品のみしか取り上げられていない²⁵。そこで筆者がすべての活動に着目して調査したところ、図10に示した通り、すでに1965（昭和40）年の教育出版の小学校音楽教科書に《こきりこ》が譜例付きで掲載されていることが確認できた。ちなみに《貝がらぶし》は曲名のみ掲載されていた。

他方、1973（昭和48）年には、《コキリコの歌》としてNHK「みんなのうた」でも取り上げられ、全国に普及する²⁶。同年には、無形文化財にも選択される²⁷。なお、広島高等師範学校附属小学校が1933（昭和8）年に編纂した『日本童謡民謡曲集』には、《こきりこ》は掲載されておらず、富山県五箇山地方の民謡としては《麦や節》が紹介される²⁸。

《麦や節》が1925（大正14）年、東京の日本青年館で開催された「郷土舞踊と民謡の会」で披露され²⁹、全国的に知られる一方、《こきりこ》は明治末から大正期にかけてほぼ忘れ去られていた。そのような中、《こきりこ》に着目したのは、西条八十（1892-1970）である。西条は柳田國男（1875-1962）の話から『奇談北国巡杖記』（1807）に「筑子唄」が記されていたことを知り、1930（昭和5）年、大阪毎日新聞社の委嘱で五箇山を訪問した。しかし、《こきりこ》を知る人に出会えず、目的を果たせないまま、帰途に就いた³⁰。

富山県師範学校を1926（大正15）年に卒業し³¹、小学校教員として勤務するかたわら、円浄寺住職を務めていた、高桑敬親（1900-81）は、なぜ西条が大阪から五箇山まで来訪したのかについて大きな疑問を抱き、古い文献を調べたところ、歴史的な価値に気づき、《こきりこ》をはじめとする五

箇山民謡の研究を始めた。聞き取り調査を行うと、《こきりこ》を知っていた山崎しいと出会う。成果については、1937 (昭和 12) 年に『越中郷土研究』に発表した。1943 (昭和 18) 年から 1944 (昭和 19) 年にかけては、『ひだびと』において高岡高等商業学校教授であった小寺廉吉との共著で、五箇山民謡の紹介を行った。1951 (昭和 26) 年、「越中五箇山筑子唄保存会」が設立され、高桑が会長を務めた³²。



図 10 小学校音楽教科書における《こきりこ》

出典 池内友次郎・木下保監修『新訂標準音楽5年』教育出版, 1965年 (1964年検定済), 30-31頁。

音楽デジタル教科書には、「音声」や「動画」のデジタルコンテンツが起動するものの、西洋化された音楽表現の「音声」に留まっていた。また、踊りの「動画」も収録されていない。もちろん、音楽デジタル教科書には、「教材作成」の機能があり、「ファイル」や「WEB」への「リンク」も可能なため、オリジナルな音声や動画を提示することも可能である。しかし、ここでは越中五箇山筑子唄保存会発行のDVD「DVDでまなぶ・おぼえる富山県五箇山こきりこ」(図 11, 12, 13) が教材として優れているため、音楽デジタル教科書とDVDを活用した日本の民謡の授業プランを構想する³³。今後、鳥取大学附属小学校において実験授業を計画しているため、同小学校において採択されている教育芸術社の音楽デジタル教科書を使用しての想定で授業プランを立てる。

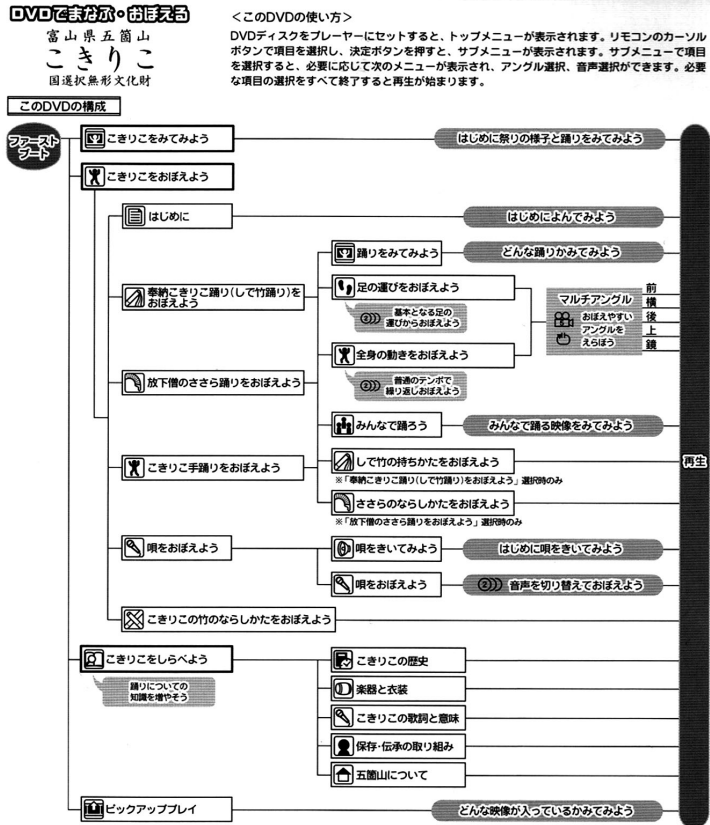


図 11 DVD「DVDでまなぶ・おぼえる富山県五箇山こきりこ」

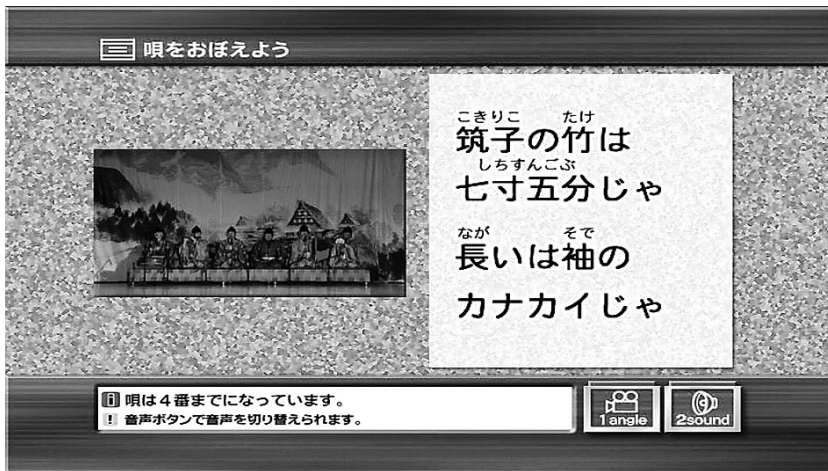


図 12 DVD「DVDでまなぶ・おぼえる富山県五箇山こきりこ」



図13 DVD「DVDでまなぶ・おぼえる富山県五箇山こきりこ」

1954（昭和29）年、「子供こきりこ」が始まり、富山県平村立下梨小学校上梨分校（閉校）では、保存会の人から指導を受けながら、学校教育の場において継承が進められた³⁴。

山崎瞳は「民謡を学校で強制的に学習することで、民謡に対して否定的な意識をもつ子どもがでてくるのではないか」という仮説を設定し、《こきりこ》の発祥の地である富山県東砺波郡平村および上平村（現在、南砺市）においてインタビュー調査を実施した³⁵。その結果、民謡に対して積極的に学習する子どもと、民謡に対して「やらされている」「他のみんながやっているから」といった消極的な子どもといったように二極化している点を言及する。

教育方法に関して、生田久美子は、学校教育では段階的学習法であるのに対し、伝統芸道では「模倣」と「繰り返し」の連続である点を指摘する³⁶。また、学校教育では明確な目標や評価があるのに対し、伝統芸道では評価の「非透明性」を挙げる。一方、安部崇慶は、皇紀夫の伝統的教育としての「稽古論」と学校教育での「練習」とする論に基づき、「諸要素を効率よく目的合理的に組織する「練習」に対して、「稽古」は、目的合理的な枠組みを「型」として設定し、専門的技法の達成を強調する一方で、その「型」の習熟成果を相対化ないしは差異化する「心」言説を学びの場面に織り込み、その活動行為全体を別の文脈に転換して語り、意味の転移ないしは浄化を図る」と考察する³⁷。このように教育方法に関して大きな隔たりがあるため、伝統的な民謡をクラス授業の学校教育で実践する場合、教育方法の擦り合わせも必要とする。

伊野義博は日本の伝統音楽の授業構成の重点として「①学習法を生かし、総体として教える。②身体性を重視する。③伝統的に用いられてきた用語やその背景にある感性・見方や考え方を大切に、音楽の概念を把握、④個の多様な学びを認め、集団の財産としてまとめ、音楽の全体性をとらえる。⑤西洋音楽の学習と呼応させながら、「音楽を形づくっている要素」の用語を用いて日本音楽の概念をとらえる」を指摘する³⁸。

ところで生田は「民俗芸能それ自体を継承（教育）するという側面」と「民俗芸能を継承することを通して主体の学びを拡げていく教育という側面」を挙げる³⁹。本稿では、後者の「民俗芸能を継承することを通して主体の学びを拡げていく教育という側面」から授業プランを構想したい。そ

の際には、「模倣」と「繰り返し」という伝統芸道の方法を取り入れる。本来ならば、教師を模倣できるのが理想なのだが、日本の伝統音楽を習熟している教師は限られる。そこで、音楽デジタル教科書やDVD等にその役割を担ってもらおう。

先行実践としては、下井田純子⁴⁰、東真理子⁴¹、松宮陽子⁴²が挙げられる。中でも下井田は、前述の越中五箇山筑子唄保存会発行のDVD「DVDでまなぶ・おぼえる富山県五箇山こきりこ」を使用して授業実践を行った。下井田は「DVDを見ることは、児童の学習意欲を喚起し、『こきりこ』に浸らせるこの授業では抜きにできない貴重なポイント」とし、「DVDのどの部分をどのくらいの長さ見せるのか、また静止画像はどの部分使うのかなど、吟味しておくべきである」と述べる⁴³。ただし、これらの実践については、音楽デジタル教科書が発行される以前のものであるため、当然のことながら音楽デジタル教科書は使用されていない。また、踊りの実践についても取り上げられていない。

下記は、筆者が作成した学習指導案の一部である。「3 学習計画」に関して、教科書の教師用指導書では展開されていない、「踊る」という活動を第2次第2時に設定した。また、第3次は「郷土の民謡」と位置付け、鳥取県の代表的な民謡である《貝殻節》の表現活動を設けた。この計画により、日本の民謡の特徴をつかんだ後、全国的な民謡と地域の民謡の両側面から学習できる。

- 1 題材名 日本の音楽に親しもう
- 2 題材目標
 - ・日本の音楽の雰囲気や特徴を感じ取りながら、我が国や郷土の伝統音楽に親しむようにする。
 - ・日本の旋律の特徴を感じ取りながら、聴いたり表現したりすることができるようにする。
- 3 学習計画（全6時間）
 - 第1次 音楽のとくちょうを感じ取りながら、日本の民謡をききましょう。
 - 第1時 《ソーラン節》と《南部牛追い歌》の比較鑑賞
 - 第2次 日本の音楽のふんいきを感じ取ってえんそうしましょう。
 - 第2時 《こきりこ》の曲の感じをつかみ、踊る。
 - 第3時 《こきりこ》の曲の感じをつかみ、歌う。（本時）
 - 第3次 郷土の民謡
 - 第4時 全国にある民謡について調べたことを発表する。
 - 第5時 《貝がら節》の曲の感じをつかみ、踊る。
 - 第6時 《貝がら節》の曲の感じをつかみ、歌う。

以下、第2次第3時の「《こきりこ》の曲の感じをつかみ、歌う」を本時として、学習指導案を作成した。デジタル教科書を活用する場合は、「☆」、DVDを活用する場合には「◎」とし、学習指導案上にも明記し、配慮している。

4 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・日本の音楽の雰囲気や特徴を感じ取りながら、《こきりこ》に親しむようにする。
- ・日本の旋律の特徴を感じ取りながら、《こきりこ》を聴いたり歌ったりすることができるようにする。

(2) 本時の展開

学習活動	教師の支援 (・) 意図 (○) 評価 (◇) デジタル教科書 (☆) DVD (◎)
1 《こきりこ》を踊り、前時の復習をする。 2 《こきりこ》のDVDを鑑賞し、曲の感じをつかみ、感想を発表する。 ・昔の感じがするな。 ・「デデレコデン」って何。 ・今日は、歌にもチャレンジしたいな。 3 本時のねらいをつかむ。	◎DVDをかける。 ◎DVDをかける。 ○踊りではなく、歌に着目できるようにする。 ・子どもの感想を活かして本時のねらいを設定し、板書する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">《こきりこ》の曲の感じをつかみ、歌おう。</div>	
4 音程やリズムに気を付けて《こきりこ》を繰り返し歌う。 ・低い声で歌うのだな。 ・だんだん歌えるようになってきたよ。 5 こきりこについて理解する。 ・音楽デジタル教科書だと、写真が大きくなり、見やすいな。 6 歌詞の意味を理解する。 ・難しい歌詞もよくわかったよ。 ・もう一度、歌いたいな。 7 歌い方の特徴を感じ取り、工夫をしながら、《こきりこ》を歌う。 ・歌詞が分かると、気持ちよく歌えるよ。 ・伸ばすところの歌い方を気付けたいな。 8 本時の学習を振り返り、感想を書く。	◎「唄をおぼえよう」を使用。 ○模倣と繰り返しを取り入れる。 ☆こきりこの写真を 拡大 し、楽器の説明をする。 ☆歌詞をクリックし、表示する。難解な語句の意味についても表示し、解説する。 ・慣れてきたら、アカペラでも歌えるようにする。 ◇日本の旋律の特徴を感じ取りながら、民謡にふさわしい表現で歌っている。【観察】 ・《こきりこ》について各自で調べてくるように指示する

おわりに

2012 (平成 24) 年に教育芸術社から中学校音楽デジタル教科書が発行されたのを封切りに、2015 (平成 27) 年には、教育芸術社と教育出版の全社から小学校音楽デジタル教科書が発行された。2016 (平成 28) 年には、教育出版からも中学校音楽デジタル教科書が発行され、義務教育で使用されるすべての音楽教科書のデジタル版がなされている。

小学校音楽デジタル教科書には、教育芸術社、教育出版とも「音声」が収録され、教育芸術社に関しては、「和だいこの打ち方」の「動画」も掲載され、デジタル教科書の特徴を反映している。しかし、残念ながら、両社とも西洋化された音楽表現の「音声」に留まっていた。ちなみに教育芸術社の中学校音楽デジタル教科書には、コブシ等の日本の伝統的な歌唱方法で歌われた「動画」が掲載されている。小学校音楽デジタル教科書の改善が望まれる。

今回は「民俗芸能を継承することを通して主体の学びを拡げていく教育という側面」から「模倣」

と「繰り返し」という伝統芸道の方法に基づき、授業プランを構想した。その際、「踊る」という身体表現を取り入れたり、全国的な民謡の《こきりこ》と地域の民謡の《貝がら節》の両側面から学習できるようにしたりした。今後は、鳥取大学附属小学校において実験授業を実施し、検証していきたい。そして、日本の民謡に対する造詣が浅い教員であっても、音楽デジタル教科書とDVDを活用することで、無理なく実践できる指導法を開発していきたい。

付記

本稿は、平成28年度一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団第6回音楽振興部門の研究助成金「《貝がら節》継承のためのデータベース化と教材開発」ならびに平成28年度鳥取大学地域学部学部長経費「音楽デジタル教科書を活用した指導法の開発」の助成を受けた。

注

- ¹ 教育再生実行会議「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」2015年5月14日。http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai7_1.pdf (2017年2月6日閲覧)
- ² 「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議『「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議 最終まとめ』2016年12月、26頁。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/110/houkoku/_icsFiles/afiedfile/2017/01/27/1380531_001.pdf (2017年2月7日閲覧)
- ³ 同書、25頁。
関連する研究は以下の通り。
赤堀侃司 研究代表『研究報告 デジタル教科書に関する意見聴取報告書：学習者用デジタル教科書をどう考えるか（座談会）』No.89, 公益財団法人中央教育研究所, 2016年。
- ⁴ 坂本暁美「音楽科デジタル教科書の内容に関する一考察：教員養成課程の学生・初任教師の授業支援ツールとして」『四天王寺大学紀要』第58号, 2014年, 217-229頁。
- ⁵ 坂本暁美「音楽を教えることに不安を感じる教師にととのデジタル教科書の可能性：教員養成課程の学生の模擬授業を通して」『四天王寺大学紀要』第60号, 2015年, 245-257頁。
- ⁶ 坂本暁美「小学校音楽科デジタル教科書活用の実証研究」『四天王寺大学紀要』第61号, 2016年, 177-196頁。
- ⁷ 関連する研究は以下の通り。齊藤忠彦「音楽科教育におけるICT活用の可能性」『音楽鑑賞教育』季刊Vol.8, 通巻512号, 公益財団法人音楽鑑賞振興財団, 2012年, 40-43頁。深見友紀子「日本のデジタル教科書改良に関する提案：韓国視察、日韓デジタル教科書比較を通じて」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11no.2 (通巻22号), 日本音楽教育学会, 2014年, 22-26頁。
- ⁸ 永見市立宮田小学校「音楽科におけるタブレットPCやデジタル教科書等を活用した「授業事例集」の開発：日常的なICT活用による授業の改善」『公益財団法人パナソニック教育財団実践研究助成報告書』2015年。
http://www.pef.or.jp/wp-content/themes/panasonic_theme/db/pdf/041/2015_18.pdf (2017年2月7日閲覧)
- ⁹ 佐川馨「「郷土の民謡」の音楽的価値と教材としての有効性：秋田民謡を取り入れた授業の分析を通して」『音楽表現学』Vol.4, 日本音楽表現学会, 2006年, 41-48頁。
- ¹⁰ 志民一成「地域および附属学校と連携した日本伝統音楽授業の実践報告：能楽と民謡の授業を中心に」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.22, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター, 2014年, 135-144頁。
- ¹¹ 太田綾香・大谷美佳・宮脇可南子・安田彩花・鈴木慎一郎「鳥取市の学校教育における《貝がら節》の教育実践に関するアンケート調査報告」『地域教育学研究』7巻1号, 鳥取大学地域学部, 2015年, 72-77頁。
- ¹² デジタル教科書と電子黒板の活用促進プロジェクト「デジタル教科書と電子黒板の現状と標準化への提言：標準化分科会まとめ」日本教育工学振興会, 2014年, 1頁。
http://www.japet.or.jp/Cabinet/?action=cabinet_action_main_download&block_id=204&room_id=1&cabinet_id=1&file_id=403&upload_id=1036 (2017年3月6日閲覧)
- ¹³ 今井康人「デジタル教科書の現状と今後：音楽科のデジタル教材活用を中心に」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11no.2 (通巻22号), 日本音楽教育学会, 2014年, 16頁。
- ¹⁴ 教育芸術社 <https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/h27es/161021price.html> (2017年5月6日閲覧)
- ¹⁵ 教育出版 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/degital/cate1/post-19.html> (2017年5月6日閲覧)
- ¹⁶ 教育芸術社 <https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/h28jh/> (2017年5月6日閲覧)
- ¹⁷ 教育出版 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/degital/cate2/post-20.html> (2017年5月6日閲覧)
- ¹⁸ 小原光一『小学生の音楽4』教育芸術社, 2016年(2014年検定済), 44-47頁。

- ¹⁹ 新実徳英監修『小学音楽 音楽のおくりもの4』教育出版, 2015年(2014年検定済), 38-39頁。
- ²⁰ 新実徳英監修『小学音楽 音楽のおくりもの5』教育出版, 2015年(2014年検定済), 28-33頁。
- ²¹ 関連する研究は以下の通り。
日本放送協会編『日本民謡大観 中部篇(北陸地方)』日本放送出版協会, 1955年, 224-225頁。
『日本民謡全集 ③関東・中部編』雄山閣, 1975年, 165-167頁。
川村清志「近代における民謡の成立: 富山県五箇山地方「こきりこ」を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』165号, 国立歴史民俗博物館, 2011年, 175-204頁。
- ²² 大高利夫『歌い継がれる名曲案内 音楽教科書掲載作品10000』日外アソシエーツ, 2011年, 472-473頁。
- ²³ 同書。
- ²⁴ 木村信之『昭和戦後 音楽教育史』音楽之友社, 1993年, 247頁。
- ²⁵ 本多は、「こきりこ」について音楽之友社の小学校音楽教科書では1983(昭和58)年, 教育芸術社の中学校音楽教科書では1972(昭和47)年に掲載されたと言及する。本多佐保美「音楽教科書にみる日本伝統音楽教材の取扱い」音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』開成出版, 2006年, 121-122頁。
- ²⁶ 葉口英子「“みんな”の『みんなのうた』: NHK音楽番組の生産・消費をめぐる一考察」『マス・コミュニケーション研究』No. 62, 日本マス・コミュニケーション学会, 2003年, 119頁。
- ²⁷ 越中五箇山筑子唄保存会編『こきりこ: その由来と歴史ほか』2001年, 24頁。
- ²⁸ 広島高師附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』1933年(1978年柳原書店発行使用)。
- ²⁹ 日本放送協会, 前掲書, 213頁。
- ³⁰ 同書, 225頁。
- ³¹ 大正期の富山県師範学校附属小学校では「教科書中心から子供の意欲と生活経験を重視した教育へ」という「児童中心主義教育」の新教育運動が展開されていた。1920(大正9)年, 広島高等師範学校から富山県師範学校附属小学校主事として中田栄太郎を迎え, 「北方教育」と称し, 新教育運動を推進した。また, 1921(大正10)年には奈良女子高等師範学校から富山県師範学校の学校長として蛭川龍夫を迎え, 新教育運動を展開した。1924(大正13)年には, 「ドルトン・プラン」の創始者ヘレン・パークスト(Helen Parkhurst, H, 1887-1973, 米)が訪問している。
富山大学年史編纂委員会編『富山大学五十年史 下巻』富山大学, 2002年, 365頁。
- ³² 越中五箇山筑子唄保存会, 前掲書, 14-16頁。高桑敬親『古代民謡 筑子の起原考』1970年。
- ³³ 独自のDVDを作成して伝統芸能学習を行った先行実践として, 奥が挙げられる。
奥忍「能楽師と共に創り上げる能の表現学習:《船弁慶》を中心に」『音楽教育実践ジャーナル』vol.12no.2(通巻24号), 日本音楽教育学会, 2015年, 88-99頁。
- ³⁴ 坂本義明「子供こきりこ最初の年」『こきりこ: その由来と歴史ほか』越中五箇山筑子唄保存会, 2001年, 33頁。
- ³⁵ 山崎瞳「郷土芸能を通じた学校の取り組みに関する研究」『佛教大学大学院紀要』第33号, 佛教大学2005年, 279-289年。
- ³⁶ 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会, 1987年, 9-17頁。
辻本は, 学校教育を「教え込み型」, 日本の伝統的な学びを「滲み込み型」(模倣と習熟)と捉える。辻本雅史『「学び」の復権: 模倣と習熟』角川書店, 1999年。
梅本は, 邦楽の伝統的教育方法を「教えない」という教育法」と指摘する。梅本堯夫「邦楽の伝統的教育法」梅本堯夫・中原昭哉・馬淵卯三郎編『アブサラス: 長廣敏雄先生喜寿記念論文集』音楽之友社, 1985年, 177-190頁。
- ³⁷ 安部崇慶「第1節 「伝統と文化」に関する教育のパラダイム: 芸道稽古論を中心に」安部崇慶・中村哲編『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所共同研究プロジェクト, 風間書房, 2012年, 13頁。
- ³⁸ 伊野義博「我が国や郷土の伝統音楽を授業で扱う具体的な方法論」『音楽鑑賞教育』季刊 Vol.2, 通巻506号, 財団法人音楽鑑賞教育振興会, 2010年, 21頁。
- ³⁹ 生田久美子「9 民俗芸能を学ぶ子どもたち: 2つの神楽の伝承事例を通して」佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』東京大学出版会, 2003年, 185頁。
- ⁴⁰ 下井田純子「民謡《こきりこ》旋律とリズムの重なり」小島律子監修『日本伝統音楽の授業をデザインする』廣済堂あかつき, 2008年, 87-93頁。
- ⁴¹ 東真理子「民謡のおはやしづくりにみられる子どもの知覚・感受を基盤とする思考過程:《こきりこ》を教材として」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会紀要, 13, 2009年, 135-136頁。
- ⁴² 松宮陽子「文化的側面の学習を土台とした日本伝統音楽の単元構成:《こきりこ》を教材として」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会紀要, 14, 2010年, 65-66頁。
- ⁴³ 下井田, 前掲書, 91頁。